

「素足の作業で傷」「服と食糧交換」

南方抑留 過酷な日常

戦後に東南アジアで降伏日本軍人として強制労働を強いられた「南方抑留」の様子を記した元兵士らの文集が復刻された。現地で元兵士らに配られた500部の文集の大部分は帰国時に廃棄されるなどし、専門家の間でもほとんど存在が知られていなかった。未解明な部分が多い南方抑留の実態を伝える資料として、研究の深化につながる期待される。

(京都総局 岩崎祐也)

元兵士らの文集 復刻

戦後80年

遺族が託す

復刻された冊子は「南方抑留資料が現代に問う『戦争』と『戦後』」(約150部)。京都大の山本博之准教授(マレーシア研究)



復刻した冊子を手にする山本准教授。文集「噴焰」の原本(右)は傷みが激しい(京都市左京区で)



●野田氏が労働風景を描いたスケッチ画(1946年1月) ●野田氏のスケッチ画「内還ニュースを読む」(1947年5月14日)＝いずれも山本准教授提供



南方抑留 東南アジアなどの戦地に残された旧日本兵らが連合軍の下、資材運搬や開拓事業、港での荷揚げ作業などの労働を強いられた。抑留者数は70万人以上とされ、1946年5～9月に約60万人が帰国。48年1月に残る抑留者の引き揚げも完了したが、現地で感染症などで命を失った人もいた。

ンダウ収容所で抑留されていた元兵士らが地図の裏や包装紙にしたためた随筆や俳句、短歌などをまとめたもの。「エンダウ海軍作業隊」の副官だった森山幸晴氏が発行者になっている。

山本准教授によると、1947年3月に500部が作られ、抑留中の元兵士らに手渡されたが、帰国時の検査で廃棄されるなどし、多くは残っていない。

「絶体絶命」

が、海軍航空隊に所属し、南方戦線で終戦を迎えた野田明氏(1922～2018年)の遺族から託された文集「噴焰」を現代の仮名遣いにしたり、紙の劣化による文字の欠落を補ったりして、1年近くかけてまとめ、昨年10月に刊行した。

文集「噴焰」は、英領マラヤ(現マレーシア)のエ

下にあったおここのような文献的文芸作品を生み出す日本人の驚くべき底力を示さんがために刊行するものであります。冒頭にそう記され、「エンダウ開拓小史」「随筆」「戦記」などで構成される。

現地での交流については「戦争中、吾々が現地人に示したつもりは、今から思えばあさましい代物であった。(中略)今度こそ彼らへふさわしい贈物をしたく思う」とも記述。日本軍が戦時中に捕虜とした英国人が作業隊の指揮官に就き、1か月無休で働かされたとの記述もあった。

山本准教授は「被害も加害もあるのが戦争。現地で語られている歴史と照らし合わせ、当時何があったかを明らかにするために重要な資料だ。戦争で途切れた日本と東南アジア関係史の新たな面が出てくるかもしれない」と語る。

南方抑留を連合国側の公文書から研究する「帰還者たちの記憶ミュージアム」館長の増田弘・立正大名誉教授の話「連合国軍による抑留政策には地域差がある上、抑留期間が比較的短かったこともあって、南方抑留の実態は十分に明らかにされていない。文集もスケッチ画も臨場感があり、過酷で不自由な環境下に置かれていた様子がわかる。新たな研究が始まるきっかけになる」

森山氏が執筆した「エンダウ開拓小史」では、抑留生活の様子を克明に記載。素足の作業による外傷などで作業員が減ったこと、現地の人との物々交換で食糧を補っていたことを説明し、△取り換えすべき被服もなくなくなった。絶体絶命の関頭に立った△などと明かしている。

冊子は150部作成し、抑留や引き揚げに関する記念館や資料館、大学図書館などに寄贈した。

重要な資料

緻密に描写 早期帰国訴え

スケッチ画

冊子には、文集とは別に、野田氏が手がけたスケッチ画40点以上も合わせて収録された。

スケッチ画は、野田氏が「エンダウ海軍作業隊」の上官の指示で、日本政府に早期帰国を訴えるために現地の様子を描いたという。実際に本国へ送られたかは不明だが、

野田氏は1947年7月の引き揚げ時に約180点を持ち帰った。収録されたのはその一部で、現地の人々や風景のほか、元兵士らが裸でくわを担いで列をなす姿や、内還(内地帰還)ニュースを食い入るように読む人などが力強い筆致で緻密に描かれている。